

宮城県のマガキとワカメの養殖復興を支援

宮城県は全国2位のカキ養殖県ですが、養殖に必要な種ガキ供給では日本の大半を占め、全国のカキ養殖を支えています。今回の津波で、親貝でもある養殖ガキの大部分が消失しました。そのために、親貝の産卵で発生する浮遊幼生数の激減が想定され、浮遊幼生をホタテガイの殻に採集する種ガキの採苗への影響が懸念されました。そこで、水産総合研究センターでは、以下の調査、プロジェクトなどに協力することで、宮城県の養殖業復興の支援を行いました。

マガキ天然幼生発生状況調査

宮城県水産技術総合センターでは、効率的な種ガキ採苗ができるように、マガキの浮遊幼生調査を行いました。今回の津波の影響を調べるため、調査定点数の拡充が検討されていました。そこで、当センター

では、この調査に活用できるような新潟市にある日本海区水産研究所から小型調査船「いそなみ」(2.6トン)を、ただちに塩釜市の東北区水産研究所に移送しました。この調査で得られた情報は、宮城県水産技術総合センターのホームページに掲載され、漁業者の採苗作業に活用されました。

マガキ養殖復興支援プロジェクト

東北大学、ヤンマー株式会社、宮城県と当センターの産官学4機関が宮城県漁業協同組合の協力を得て、人工生産種苗を活用して

マガキ親貝を増やす支援プロジェクトを行いました(図)。なお、宮城県への持ち込み前には厳重な疾病検査を行っています。その結果、8月上旬～下旬に累計約

★宮城県水産技術総合センター

宮城県からヤンマー(株)への親貝送付

★ヤンマー(株) マリンファーム(大分県)

人工授精による幼生の生産

★東北大学

疾病検査

★東北区水産研究所(宮城県)

幼生の採苗器への種付け

●宮城県漁業協同組合

海面の養殖場での親貝までの養殖(松島湾、石巻湾)

東北区水産研究所

DNAによる親子判別*

親貝の復興



10月12日の状況
順調に育っています

種ガキの安定した生産

★プロジェクト参加の産官学4機関

●協力機関

*稚貝をサンプリングし、DNAによって親貝と親子判別することにより、人工生産種苗由来の貝と後に付着した天然貝とを区別し、人工生産種苗の評価を行う

図. マガキ養殖復興支援プロジェクトの概要と役割分担

ワカメ配偶体の維持・拡大培養

宮城県水産技術総合センターの施設は、津波により甚大な被害を受け

1300万個体の人工生産稚貝を付着させた採苗器を松島湾と石巻湾の養殖場に提供しました。現在、漁業者の手により試験養殖が行われており、10月上旬の調査により順調な生き残り成長を確認しています。今後はこの種ガキが、りっぱな親貝となって産卵し、マガキ養殖に貢献できるかDNAによる親子判別なども行いながら調べていきます。

ましたが、幸い養殖用種系作製の元となるワカメの雌雄配偶体の一部は無事でした。そこで、これら配偶体について施設被害の少なかつた東北区水産研究所で宮城県と共同で拡大培養に努めました。その結果、得られた大量の雌雄配偶体を細断・混合して糸に付着させて種系を作製し、漁業者に提供することができました。今後は、宮城県などと協力し、今回の震災をきっかけにみられた養殖業者自らによるワカメ種系の作製などの試みに技術的側面から支援していきたいと考えています。